



岷江入楚

松風

第十八

特別  
~ 12  
4604  
17





112  
4604  
17 .





松風

女歲 內大信

東院造畢在散里移行事

西對小江信

明石上可有上信之由事

明石上修理大舟山庄事

確為取之也

明石上并母上車具昨忘上信事

秋原氏出曉識信之次對面即石上事

須以古給波定例時海舟事 津堂換極信堂也

桂殿道遠事

小倉事

五月三日進田大舟家信事

自內裏有御書便事

改二系院給若石夏定信上信事

明石信之歲也

小江文庫



松尾 以并並親為卷后 在手紙

手紙  
身を之ていなり之れはしりまにたつて松尾の

け方のちれ親よのいふのいふなるいふのい

ふのいふのいふのいふのいふのいふのい

いふ松尾のいふのいふのいふのいふのい

てよりあつたあつたあつたあつたあつた

原女殿乃申也 繪合同年也

或抄是のいふのいふのいふのいふのい

て原女殿のいふのいふのいふのいふのい

ひんかの院つらり

し女巻よ二条院のいふのいふのいふのい

いふのいふのいふのいふのいふのい

乃まらよいふのいふのいふのいふのい

つせ未福くく始終いとむりなり

二条院の東乃院也 蓮生の巻乃末より送活りみえり



或也二条院ヨリ 東にありて院也

にのたいやのぬらやうけて 西對 渡殿

是二条院ノ東院ノ西對也花ちる里、任多あり

申抄の法、渡殿と先造てられ、對して西東に對と

申抄也、對に内、方也

まゝしりけい、と 政所家司

政所と家司と、ちののり、ち、ち、ち、ち、政所家司也

よう、の、れ、れ、れ、れ、居て、り、お、ち、ち、申也

ひん、の、たい、わ、り、り、り、り、り、り

ひん、の、たい、わ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

水のたい、り、り、り、り、り

水、の、たい、り、り、り、り、り

私、わ、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

甲、お、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

私、の、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

渡殿、東室、乃、居、處、也、係、氏、い、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り

り、り

也、妻、之、言、奇、也、以、礼、見、問、則、為、更、歌、辭、妻、之、言、接、也、言

得、接、見、於、君、子、不、得、与、更、歌、辭、也、一、り、聘、也、礼、送、也、妻、媒、心

也、御、合、之、言、さ、り

何、由、之、後、あ、や、も、れ、り

東、院、ノ、渡、殿、と、二、條、院、の、内、也、り

け、り

能、者、よ、何、由、の、後、と、あ、や、も、り

ぬ、ん、と、れ、れ、六、条、院、り

心、あ、り、と、み、え、り、り 申抄、四、法、也、同

す、と、ほ、は、二、条、院、と、申、妻、り







いしけしきふれにけりし仲つゝいれま

前仲書王為明事欽号小倉宮

亮未家賦云余電山々下聊下函辞官休身欲終先

歌此退草堂之衝床為執政者在被簡矣君昏臣

諫意延于朝

龍砌御子仲務公黃明賦主山丘臣大井何畔号確苑

賦け歌主との名ノ母君ノ祖又とてり

の名居ノ祖又仲務云々為明賦主とてり

我極に流云々仲書と亮未家賦ヲ作りカ下キウノ

名也唐ノ名也

らうしけけり 領しりふ

あいつて今

不仲まじり此果よおしきんか

ふいりて

人のいふ

世中としい

是ら宿りりよ對して

の名上の心 私は上の名より女の宿守よ

秘の事

の事とて

夫の世よ

の事とて原氏の見らあまひて

に

高へたと出んよりしちと

すなはて

志つち

心り

ち

大井の事

さういふ

上段 田舎

造作ノ料

形のこと

いれま



あつらひ 二のきしり

宿寺のまじり

らすすくわわくはつた

中ゆき侍心い為明堂より一男をいり後れ漢

して白人あしとせ

阿やしきんつよ

何故

私ひのくやうありてとあり

あやにう

何れを

執念せ

これまの比りうらけ大ねのつらせりふ

ゆ大信は信也

信の信識ノ御堂ノ事也

繪合巻の末よりつくりのむすり信堂棟宿寺ニツカあす

らへゆりた大足とれもよわてと下みより栖霞親

いた大信融るノ山庄也後より成る棲霞寺と云

しノ信涼もノ承よあは阿保院堂ノ信涼もいり

西あちち也 小野文左府記永延元年八月十日信橋

上人位喬並申請云以愛大文山五景山内清涼寺建  
立一伽藍置白旃檀釈迦尊像之付尺迦八喬物入唐  
てわつてしむん也但信涼山とてふ名は者よりし  
貞観七年ノ圖文より又李邦とて天慶に栖霞  
窟も尺迦堂と云せり喬かたつて信りより記し  
尺迦堂いふことありつる事也下信信涼寺とい  
ふことありありけり中へ喬を別一堂とて三信  
り尺迦と云置しむるや

最良殿

噪

おほくのんあつたりいと

信(家)孔の受れるとん信りて信るすあり

あつらひのあつらひ

秘事つらむと信りて心

けあつらひりやぶらてり

くまつらとせ

あつらひのあつらひ

あつらひのあつらひ

あつらひのあつらひ







必 かりといひしつてり候すよりとて

ふれわたりたくりのゆを 何産

秘 上落ありては田をさげたをさうあけられてをあや

うけま回してんせ

ひごしちまほなりしつて

秘 行連あしと畧しつて 半日

秘 強顔ほれけしつてけなるにほか細を枕まよひけ

つらむとわさとのちあつ尺とつと何ぞ

ちらあさつて 秘 ちらぢぢのかりと云うと

半 秘 ちらちら 秘 機撫に 秘 ちらちら 秘 ちらちら 秘 ちらちら

まにちら田をさうせ 辰ノ月也

秘 券りしつてにあれと

秘 券の文書ノ事 同券のしつて訓

秘 券の支控ノ物也 秘 券のしつて 秘 券のしつて

大ぬれたるのしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて

秘 券のしつて 秘 券のしつて 秘 券のしつて



とわめ是す源ノ心中也

くつりありたりと

秘 人あるに所をよむるにせりともる也

られらのありん

秘 惟光をつりてつらみきりぬ

ありあつてあつてあつてあつて

秘 大井川の邊るにありつるに似りての石浦すは流り

たよりあると

私惟光のゆきてりぬ

きりのすぬか

秘 源心也ゆふとるのふりすぬかもつらぬり

よ〜あり〜ありあり〜

何 由あると

片々もりふみ〜あり〜のみあり

秘 大足寺の南なる栴檀寺を〜つてけり〜はる〜

何 大足寺事

旧記曰正子因款王

源和名 源順皇女

兼和七年十月日入道

依信和 崩

貞觀十八年二月廿日以嵯峨院為大覺寺奉信和院大

右令有請嵯峨院為大覺寺之由夢惟見菅原

集應和四年二月廿三日御記云白大信於前定権寺

別當兼深重行朝臣為大覺寺別當

大足寺ありと嵯峨院と号せり嵯峨天皇首因致也

たまとの心く人か〜す

秘 院あり大足と〜大足を〜院あり栴檀寺

もあ〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

秘 院あり大足と〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

何 院あり大足と〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

秘 孝王王記延和八年云於栴檀寺清和天皇親至周忌設講舎

大納言及入礼大吏於院あり小新堂院南海院并法興寺

及入礼大吏於院あり小改進水飯 某明物を旧名あり全

秘 院あり大足と〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

人あり舎人共推量と〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

あり院あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜

秘 院あり大足と〜あり〜あり〜あり〜あり〜あり〜







源氏悉りゆりよわらぬ人よ...  
原のちまうりけりや...  
ちまうりけりや...  
ちまうりけりや...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...

あいなす...  
あいなす...  
あいなす...



秘  
けすんくまぬ身と流くこと思ふ一よ思ふくけさる  
まの出来ぬよと

さうさうさう支那のこころいふならんは後世乃侍とあ  
らざるはけふの侍と流んとすくはるるは後世乃侍  
ありてそむ命

ありてそむ命まの命をわらうさすはけくつりたてふ  
うらわち

つらたへくつりたてふつら  
まさんくつりたてふつら

宰相乃あま又数ふられて京もよひ下りんこれ  
心中くく京と見すてあせうつら心づけりて  
思はるるに後世の

のかりくつりたてふつらこれ面白京よりけ  
心はあつら

ふらるはまらく社ねれらあり  
かりくつりたてふつら

うれ日とあつら

上落乃日乃事  
海のこころいふつら  
入る進いやとつら

常の浪東乃かこころいふつら  
夜ふつら後東とあれつら

かこころいふつら  
たこころい座つら

つらつらつら  
門出るれを流しつら  
わつらつらつら

つらつらつら  
つらつらつら

史記曰尚有徑守珠照車前漢各十二京  
楚王信諸侯蛇ノ病ヲ命タリニ蛇七寸ノ玉ヲ合テ夜来テ  
思思ヲ報シテリ諸侯け玉ヲ得テ楚王献ス夜中常有光  
明故名夜光玉











かゝるにわづら入道せうりのつらさ  
しほ接せうりもあつてつらさぬいせしむる女せうりりりり  
とつらさなりしをわづらひし人のつらさなりし  
を交れぬしつらさなりしをわづらひし人のつらさなりし  
をわづらひし世をすんよふささうとてつらさなりし  
ぬすりつてつらさなりしをわづらひし人のつらさなりし

わづらひし世をすんよふささうとてつらさなりし  
ぬすりつてつらさなりしをわづらひし人のつらさなりし

孝経曰詩曰夙興夜寐亡忝余所生 註曰當夙夜寐進  
徳終業以無忝辱其父母  
私けまんの行かこぬしつらさをわづらひし人のつらさなりし  
受れぬささうに當ふ得ふ多付テノしつらさをわづらひし人のつらさなりし  
しつらさをわづらひし人のつらさなりし

成さしりて當ふ乃利つらさをわづらひし人のつらさなりし

やそ世とすつらさをわづらひし人のつらさなりし  
私二がゆ京しせしむるつらさをわづらひし人のつらさなりし  
てすれつらさをわづらひし人のつらさなりし

私二がゆ京しせしむるつらさをわづらひし人のつらさなりし  
てすれつらさをわづらひし人のつらさなりし

私二がゆ京しせしむるつらさをわづらひし人のつらさなりし  
てすれつらさをわづらひし人のつらさなりし

私二がゆ京しせしむるつらさをわづらひし人のつらさなりし  
てすれつらさをわづらひし人のつらさなりし

富貴不敗家如衣綿夜行 朱買長袴と伊行入奥入



業くけし尚不叶可勤

私を弄ホよつて心斗うてを

仏神とてめを

秘 何者ふとてめを弄けしを

私仏とて六時つとめにしこのまを心すしれくうら

ますうらとてめを弄けしを

うらとてめを弄けしを

みりてまつらるる身のを

秘 行末いふと又おのいふとて

けりてのうらとて

娘衣の出来たるを

ちきりてよとて

け娘衣ののりぬ縁とて名とて別して宿縁あり

とありてとて上落するを

とてまつるるを

此とてまつるるを

世とすてそとて身ありてはわかすよとて

名とて世とて

秘 瑞曼ののりとて

の名とて非を

入道乃才と早下メイリ

天よむし人のあやとて

地獄餓鬼畜生とて三途といふ

人天とて六道とて三途といふ

天人墮とて三途といふ

おとけお後するんおとて

すうまたとて

といふやとて

秘 何れ不便なる天よむしとて

何れ今業を加へて

とて

ありけとて

いらよとて

いらよとて



は若めるとも正法念經云天上欲退時心生大若地獄諸  
若毒十六不及一又經云果報若盡還墮三途（三）  
天人乃しりよけ界をも末て又天より下り阿彌の心  
私弄花正法念經の文とと入て別ノキワノ悲ノ深キ  
ヲラもなげ又と云ナラセリ入たノスメ別ノ悲斗カハ  
右に付と入ルキアリ

このついでに

口下は若の心とあつし結うると云はれある幸ありわ御  
そな其知若若榮卷あり重流るふらして略く書向  
山くぬらひは

母はよきわらひのなまふ子せといのく人のこれあ  
らるる心とあはれし

唯若れ此の心とあはれし六付乃つとあはれし  
いりあはれしとあはれし入たのあはれ

心車にあはれしつらん  
心ノ悲の多るあはれし

心ついでにけん  
車とあはれしとあはれし心ノ悲の多る人殺あはれし

心ついでにけん  
心ノ悲の多るあはれし

心ついでにけん  
心ノ悲の多るあはれし







とやうきまにみりしうらむ地あふくうたふと  
いんくわあり舟心也 け方洲波トアリ

河橋植田張騫漢武帝使トメ橋京天漢ノ嫁ヲ  
究孟律至リテ牛女逢ノ敵リ事ヲ思泳たれ

文選三十年トアリ 三十歳ヲ經テ瑞リシ也

日不記 仁徳天皇四時跋何回大井川よあさるる木  
あつれ下とみく彼個人吾子露付本をたて始らみと造  
びしてああ(ま)りて難波浦に付造これに紅と号ス  
岸流舟輕よとふる所れしり華船舟多紅若撥擇舟  
下多あり空舟孫あまきり流りし紅あり又赤武  
山宗神意神天皇の四時と紅と造とみり今時  
流布ノ紅ハ公吾子露始造出けん

松岡云張騫孟律トありゆりし事ころれぬ紅  
ゆつして平意あらんす人者三十三ト云ヨリミ  
いカキキ宗物也ゆふ林のいりりくろとかり  
河野に伝分り也

ながさしれ風よて 秘 明風也

こきりける日たふといり多いぬ

ゆてりれ日とさる一日列入洛也

しら乃かともあつた

赤くしりありて大井まを乃流は赤のうらぬに  
家れさゆえ 秘 大井乃あ也

かりしりあつたぬ

あえらる心らしせま

ゆら乃さぬ大井乃川つこさうりあつたゆら乃のあつた

いしりのうらぬゆら乃  
是は居る首信すまら乃ゆら乃のあつた

つらうらるら  
是は深なりあつたゆら乃ゆら乃のあつたゆら乃のあつた  
あつたゆら乃ゆら乃ゆら乃のあつたゆら乃のあつた  
ゆら乃ゆら乃ゆら乃ゆら乃のあつたゆら乃のあつた



わたり流りては 保て

こころあがりしをさるるは日ありぬ

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

かかばゆり同すう一と一いひて

中く物さつつけして つとて

源のこころあがりしをさるるは日ありぬ

けさうらぬまはあがりしをさるるは日ありぬ

すう一と一いひて

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

つとて

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

かかばゆり同すう一と一いひて

中く物さつつけして つとて

源のこころあがりしをさるるは日ありぬ

けさうらぬまはあがりしをさるるは日ありぬ

すう一と一いひて

河海流を登ん

けさ又か  
河海流  
とありそ  
はまのこ

河海流を登ん

中く物さつつけして つとて

源のこころあがりしをさるるは日ありぬ

けさうらぬまはあがりしをさるるは日ありぬ

すう一と一いひて

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

あひ

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

中く物さつつけして つとて

源のこころあがりしをさるるは日ありぬ

けさうらぬまはあがりしをさるるは日ありぬ

すう一と一いひて

源ノ大井へかりせん半は某ノ流そいいてめこうち

あひ



おつらつらおとせしうらむ  
或は後にはおとせしうらむ  
秘手いふとくわん浦とつたてふらむ心むん

やうおとせしうらむ

是は源のいふゆいゆいおとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ

源し又おとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

是よりおとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん

おとせしうらむ  
おとせしうらむのいふとくわん



何宗後天皇元年三月始建法興寺 今ノ元興寺也  
 水原抄云大奈寺在宇 豆麻作 日記 又葛野寺也  
 葛野院と云ふ事 奈川勝運立奈所也  
 且若菜上ノ所 理ノ法堂 其師供養也  
 奈ノ院 奈ノ院 奈ノ院 奈ノ院 奈ノ院  
 天曆八年八月廿日御記曰令元輔在奈ノ院湯  
 茂村 乃桂院別當 今桂院付跡也  
 水原河海と云ふ事 乃桂院付跡也  
 乃桂院付跡也

つらふけ

葉上の

三箇事

晋王質 石室山 晋王質 石室山 晋王質 石室山  
 述異記曰晋王質伐木至信安郡石室山見數童子圍  
 碁与質一物如棗核含之不亂局未終斧柯爛尽既  
 歸無復時人 郡国志曰石室山一名石橋山一名石山  
 晋中朝時有王質者嘗入山伐木至石室有童子數  
 四彈琴而歌因放斧柯聽之童子以一物与質狀如棗  
 核含之不復亂遂復小停亦謂俄頃童子語曰汝來



己久行速不去質應色而起柯已爛々  
思心ゆゑなり

進いりくくくくくくくくくく

山口のし女彦しもあり紫上乃もみゆは人の狂とくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

源氏大井へわたり信時紫上乃もみゆは人の狂とくくく  
源心と紫上のいひくくくくくくくくくくくく

秘 花を浸いし源心と紫上乃もみゆは人の狂とくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく

ふーのありと海ありふ

秘 源氏すくくくくくくくくくくくくくくくくく

おととを花を浸いし紫上乃

くくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 源氏くくくくくくくくくくくくくくくくく

いきつくりのくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくく

秘 源氏くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

秘 源氏くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

秘 源氏くくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくく



おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

より見わたるる

いなりし言のちかき言もいなりし言のちかき言をけり

秋のちかき言のちかき言のちかき言のちかき言をけり

秋のちかき言のちかき言のちかき言のちかき言をけり

秋のちかき言のちかき言のちかき言のちかき言をけり

秋のちかき言のちかき言のちかき言のちかき言をけり

経 始 末 也

うらまひのこころ

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

月あかりのこころ

けちのちかき言のちかき言のちかき言のちかき言をけり

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

源ノ目

うらまひのこころ

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて

おのほしきとてさるるにあらざりておのほしきとて



たてるといふ社よりいへせしむるを

お申書は旧記あれはるる也

あしけありてきあははかりありまはかつか

是よりおのぬまほのついで

いふおのちりつりしむるおのちりつりしむる

いしりあつたるおのちりつりしむる昔れ日記

しあたやあつたるおのちりつりしむる

おけあつたるおのちりつりしむるつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

えとこしつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる

おのちりつりしむるおのちりつりしむる















月乃あつたよまへりり  
大井里よまへりり  
秘

ありしよの  
月石を思ひつらひ  
かの人れい

はなとよまへりり  
まをりしよ  
かの人れい

原の地をよまへりり  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ

まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ  
まをりしよ



か原乃いささしりしと似合さるるつらあふいとて花を泣  
いささしはけ原あまは

こよあつねのしむらひつら 乃名とくあは

もろまへししむらひつら

あくねにあままりれりあはむお十キ心

いよせし

原心せ

二条院

乃名との養子いささしむらひつら

のりけちりしむらひつら

紫のまひりしむらひつら

いささしむらひつら

又がしん

乃名とのあしむらひつら

あつねとくいささしむらひつら

いささしむらひつら

あつね

乃名とくいささしむらひつら

いささしむらひつら

原乃名とくいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら

又の日に京へつらせりしむらひつら

は日大井よりあつねいささしむらひつら

乃名の院よりあつねいささしむらひつら

原乃名とくいささしむらひつら

あつねとくいささしむらひつら

大井より殿よりあつねいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら

乃名とくいささしむらひつら



























ずんたりしと 秘順流て ぶきちるる處也

門のしきりあやう多ふれは  
あやうきとわをれは

并 醉中よなきまきんく

をれくせりをつらりて  
絶句の詩をよめくつらつらりて

その揚院そのよ也  
月しれんよさういつか

かりらま東のよなり

あつちあつち  
いきぬいしとらんり

わさなりぬは遊りぬようたをせうくしと云は

おりのよあひる洞子 祐なり平綱を度  
あし人ほま

口ん禁中よりすくよう系なるんかり

うらやういけらま これもけんくのきり

いあういありけるはわを  
これ禁中い前より禁あり

あつちあつちあつち

勘又云う物忌事 長神物忌也 長神方遠 各六  
連続すうや九條右衛門紀天慶七年正月 庚辰

大政大臣は十二月廿八日所合今日同門物忌也 対系  
系し君六日物忌人為部

或は云物忌甲しありし物忌 伊弉佐吳八幡怪日天  
加天氏性大各二日合六日

あつちあつちあつち

あつちあつちあつち

あつちあつちあつち

あつちあつちあつち



原ノ系田あきしすむんむ何とてま田あきしすむん  
つきて樹院は西庭のりし人ノ書しるす  
いせうろこありて書しこよま系好より

又位ノ職し

つる人ノ書しるすむんむ何とてま田あきしすむん

美ノ

御製

係を

河

安天編云樹院分月也月中仙人樹樹り其初出对  
仙人是見ニ漸成秋後桂樹生

且名院云月中有河水上有樹樹高五百丈

つやましとあり

勅書ノ河がた

かこまの

原ノりてましとあり

と来ては正徳の

物のねとありて又とありて

宗奥乃ゆ人並のねとありて

すわけの物

依物に被物ものよあま世末末を用さるる心

しりあはらよとありて

とありあはらよとありて

いつらの庭とありて

原の庭とありて

也原

久しれ光よりたふれりて外々よりしれぬ心と

秘

我身の書末ありて

并次ノ目し

新章よりまきしとありて

くつら光とありて

つら光とありて

のとせ流けりて











にしあつとさけしり常山乃蛇勢あり

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

私をけすつりり、及ん

けあさつとさけしりたえり給

一粟ありいありしり又の目ざりて

物ともあつとさけしり

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

を信令入れ申し東好ま遊しつらわと地前と備をの

中番長三府生おまじつらよりて春日系おまじつら

使ノ羽林楽遊のとも十人百具て於社以来子後何

兼りて兼りてや信後三府生お信後とを信ノ官人

也信後、和翠、留、お役、お摺、お撲、大物、還、あつ

の時しつらよりて東好ま遊しつらわと地前と備をの

長目よ書とすつらを信とすや

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

お花はらんしともあつとさけのえのららしあつとさけ

ねさつとさけしり

神楽と約



すまわのよわくとも、ぬくく、乃録とわたり  
としよねさるるゆへ

おほわらわつて

徳より京へくるとの、井乃伊つたれよ

大井と徳、一里とつり、つる

まづ、こゝに

徳より、つる、あせ、つる、こゝに、つる、大か、つる、人、わら  
と徳の、あせ

あせ、つる

二条院

つる、つる、つる

大井の、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる

あせ、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる

秘 東上

つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる

つる、つる、つる、つる、つる、つる、つる











すゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝすゝ

らゝらゝらゝらゝらゝらゝらゝらゝ

源一

いゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝいゝ

あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

うゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

えゝえゝえゝえゝえゝえゝえゝえゝ

おゝおゝおゝおゝおゝおゝおゝおゝ

かゝかゝかゝかゝかゝかゝかゝかゝ

けゝけゝけゝけゝけゝけゝけゝけゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

さゝさゝさゝさゝさゝさゝさゝさゝ

しゝしゝしゝしゝしゝしゝしゝしゝ

ちゝちゝちゝちゝちゝちゝちゝちゝ

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

ぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝ

ねゝねゝねゝねゝねゝねゝねゝねゝ

ほゝほゝほゝほゝほゝほゝほゝほゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

みゝみゝみゝみゝみゝみゝみゝみゝ

もゝもゝもゝもゝもゝもゝもゝもゝ

やゝやゝやゝやゝやゝやゝやゝやゝ

りゝりゝりゝりゝりゝりゝりゝりゝ

るゝるゝるゝるゝるゝるゝるゝるゝ

ろゝろゝろゝろゝろゝろゝろゝろゝ

をゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝをゝ

ゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝゑゝ

おゝおゝおゝおゝおゝおゝおゝおゝ

かゝかゝかゝかゝかゝかゝかゝかゝ

けゝけゝけゝけゝけゝけゝけゝけゝ

こゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝこゝ

さゝさゝさゝさゝさゝさゝさゝさゝ

しゝしゝしゝしゝしゝしゝしゝしゝ

ちゝちゝちゝちゝちゝちゝちゝちゝ

つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

ぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝぬゝ

ねゝねゝねゝねゝねゝねゝねゝねゝ

ほゝほゝほゝほゝほゝほゝほゝほゝ

まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ







